



文部科学省IB教育推進コンソーシアム IB教育アドバイザー 好事例共有シリーズ Vol.3

一条校におけるMYPの実施:コミュニティプロジェクトと学習指導要領

2024年1月11日

ぐんま国際アカデミー中高等部

MYP コーディネーター

高松 森一郎

一条校におけるMYPのカリキュラム・マネジメントは、学習指導要領とIB/MYPの実施要件を勘案するため、より複雑なものになると言えます。どちらにも妥協しないカリキュラムをデザインするには、両者の共通点と相違点を理解し、一つの軸を持つことが肝要です。本稿では、MYPを中学校 (Year 2-4) で実施する際に要件となるコミュニティプロジェクトと、学習指導要領の総合的な学習の時間と道徳(科)の関連について、カリキュラム・マネジメントの視点から比較します。

まずは、学習指導要領とMYPの構成を俯瞰します。MYPのプログラム・モデルからカリキュラムの構成要素を抜き出し、それになぞらえて学習指導要領を比較すると図1のようになります。教科の構造は比較的整合性が取りやすいことがわかります。一方、それぞれに特有の核である、学習指導要領の総合的な学習の時間、道徳、特別活動と、MYPの行動と奉仕、コミュニティプロジェクト、パーソナルプロジェクトをどのように構成・実施していくかは、大きな検討事項と言えます。

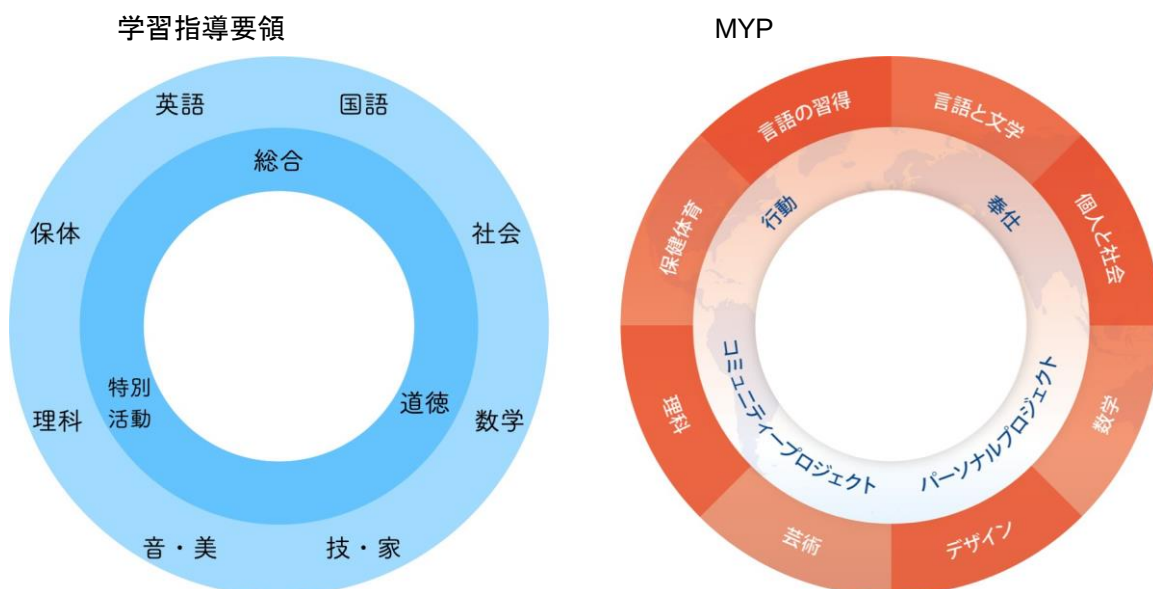


図1. 学習指導要領とMYPの構成要素の比較

さて、MYP の探究の集大成と位置付けられるコミュニティプロジェクトでは、生徒は様々なコミュニティのニーズに対する意識を高め、実際にそのニーズに対して行動を起こす機会を得ます。探究的かつ協働的な学びであり、教科を横断して培うATL (学びの方法)を発揮する場であると同時に、実社会と教科の関連を振り返り・統合する機会にもなります。その実施は教科外とされているため、多くの場合は総合的な学習の時間が検討されるでしょう。またサービス・ラーニングを基盤とするプロジェクトの性質上、道徳(科)との関連も検討されるかもしれません。ではコミュニティプロジェクトと総合的な学習の学習の時間、そして道徳(科)にはどのような関連があるのでしょうか。表1にプロジェクト・ガイドと学習指導要領で述べられている重要な共通点を示します。

[探究・体験学習、地域連携の位置付け]

コミュニティプロジェクトの過程は、調査、計画、実施、振り返り、が循環的で相互に関連するとし、これは総合的な学習の時間で、課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現、という探究プロセスが発展的に繰り返されていくことと類似しています。またコミュニティプロジェクトにおいて実社会のニーズを調査し実際に行動を起こす過程は、総合的な学習の時間が理想とする「実社会での直接的な体験を探究の過程に位置付ける」ことを具体化します。また道徳(科)についても、問題解決型学習の工夫や体験活動が重視されており、3者ともに社会課題解決型のPBLを想定しているところに高い親和性があると言えます。

[教科連携、資質・能力]

また、3者は共通して、それぞれの教育活動が各教科と直接的、間接的に関連をもち、ATL(学習の方法)あるいは資質・能力の育成を達成しようとしています。学校が重きをおくATLや資質・能力が整理されていれば、自ずとそれを実践・統合する場として位置付けられていくでしょう。

表1. コミュニティープロジェクト、総合的な学習の時間、道徳(科)の比較

	コミュニティープロジェクト	総合的な学習の時間	道徳(科)
探究・体験学習	サービス・ラーニング 長期の実践的探究 調査、計画、実施、振り返り 批判的な振り返りを重視	探究の過程(課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現)を一掃重視 直接的な体験を探究の過程に位置付ける。	問題解決型学習の工夫 体験活動の重視 ○ 職場体験 ○ ボランティア ○ 自然体験など
教科連携・学際性	他教科での学びとの関連を重視	総合的、横断的な学習	道徳科を中心として、全ての教育活動で取り組むことが重要。
資質・能力	ATLスキル(学びの方法)、生涯にわたり自主的に学ぶ姿勢を育む	学習の基盤となる資質・能力、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育む	いかに生きるべきかを考え続ける姿勢を育む
地域連携	地域やグローバルコミュニティ 実社会で行動の主たることを重視する。	実生活、実社会との接続、他者との協働を重視する。	自己との関わり、家庭・地域社会との連携を重視する。

相違点として把握すべきことは、学校裁量の部分です。総合的な学習の時間や道徳(科)は、「校長の方針の下に、(中略)特色を生かしたカリキュラム・マネジメントを行うように努めるもの」とあり、各学校にゆだねられています。一方、コミュニティープロジェクトは、表2に示すように、最終的な評価規準が決まっており、そこまでのプロセスやマネジメントもガイドに提示されています。言い換えれば、コミュニティープロジェクトを真摯に実践することは、IB教育を特色とする中学校が、総合的な学習の時間や道徳のカリキュラム・マネジメントを実践することに他なりません。

表2. コミュニティープロジェクトの評価規準

規準A: 調査	i. 個人的な興味に基づき、コミュニティー内のニーズに対応するための目標を設定する。 ii. プロジェクトと関連性のある既習事項と科目固有の知識を確認する。 iii. リサーチスキルを示す。
規準B: 計画	i. コミュニティーのニーズに取り組むための行動案を作成する。 ii. プロジェクトの進行過程を計画し記録する。 iii. 自己管理スキルを示す。
規準C: 行動	i. プロジェクトの成果として、「行動」としての奉仕活動を行う。 ii. 思考スキルを示す。 iii. コミュニケーションスキルとソーシャルスキルを示す。
規準D: 振り返り	i. 行動案に照らし合わせて、「行動」としての奉仕活動の質を評価する。 ii. プロジェクトの完了により、サービスラーニングについての知識と理解がどのように深まったか振り返る。 iii. ATLスキル(学習の方法)の発達を振り返る。

各学校のATLの焦点(= 重視する資質・能力)と、コミュニティープロジェクトの位置付けが、教員間で明確に理解されると、各教科や下位学年の総合的な学習の時間や道徳(科)、特別活動等、カリキュラム全体をデザインする拠り所となります。しかし、MYP開始当初は、必ずしも皆がその理解を持ててわけではありません。コミュニティープロジェクトの実施で徐々に見えてくる、実社会のニーズに奮闘する生徒の姿や、予期しない出会いや逆境に心揺さぶられたストーリーの蓄積が、少しずつ1条校中学校のMYPのあり方を示し、文化を醸成してカリキュラム・マネジメントをサポートしていくでしょう。

IBO (2021). MYP Community project guide.

文部科学省 (2018). 中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 総合的な学習の時間編.

文部科学省 (2018). 中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別の教科 道徳編.